

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレターNo.29

目次

巻頭言	1
高校の授業と大学の授業	2
キャンパス情報	
ー各学部からー	3
聞いてほしい私の意見	
ー前学期を終えてー	6
Voice	
ー後学期への心構えー	6
教養教育古今東西	8

(平成16年10月発行)

理系の人は本を読まない？

農学部長 松田 智明

人間を男性と女性に二分し、それぞれに当然のこととして、文化・社会が個別の役割を期待したり権利を制限することは、ジェンダーとして広く認識されるようになった。ジェンダーは社会に深く浸透し、社会の一部がそれによって動いている側面もあることから問題は簡単ではない。このジェンダーほど複雑な問題ではないが、日本社会では人間を理科系と文科系に二分し、それぞれに特定の役割を期待する傾向がある。多くの人は高校時代あるいはもっと以前から、進学を考える際に否応なくこのような選択に直面してきたのではないだろうか。興味がある分野、将来の仕事、人生の目標など積極的な理由で進路を選択した人がいる一方、理系科目が得意、文系科目が苦手といった理由で理系を、また、逆の理由で文系の学部を選択した人も少なくないようである。

文系・理系の区別は大学入試によるところが大きく、将来それぞれの系でなければ務まらない仕事やそれほど多いわけでもない。特定の資格取得をカリキュラムによって制限していることも区別助長の要因であろう。問題はむしろ、それぞれの系に期待されている社会的要請に応えなければと、強く思い込んでいる人の側にあるのではないか。理系の学生が一刻も早い専門科目の履修を強く希望し、文系の教養科目には興味がうすいのもその現われと思われなくもない。必要に迫られて専門書に目を通すだけで、専門書以外の読書には興味がなく、その時間もないという学生も少なくないようである。情報という概念が広範囲に普及した結果、読書は情報収集の単なる一手段となり、会話やインターネットよりも地位が低下したようである。しかし、いわゆる文系分野に強い理系の人、理系に強い文系の人やこれからの社会では強く求められ、貴重な存在となるような気がするのだが。皆さん、もっと読書の時間を捻出しましょう。

高校の授業と大学の授業

大学教育研究開発センター

併任教員 古屋 等

皆さんは今、教養科目を学んでいる校舎（共通教育棟）にかつて教養部があったのをご存じでしょうか。1996年の3月いっぱいまで改組されていますから、現在学んでいらっしゃる方々のほとんどは知らないと思います。実は私は教養部時代に採用された一番最後の教員なんです。ですからこのセンターの仕事を担当することになって、改めて教養部時代にかえたような感慨に耽っています。

現在、当センターで検討していることに接続教育という問題があります。そしてこの問題は、この大学に赴任する前に、1年だけではありますが高校で教壇に立っていた者として、また自分の学生時代を振り返って、ちょっとした思いがあります。というのは、高校時代はおおよそ類似した教科書を使って、同様の学習方法をとって勉強してきましたから、学習の成果はほぼ同様なものだと思います。それに比べると、大学では同じ教科でも、先生によって教える重点や編成が異なったりしますので、授業の成果が微妙に異なったり、どこをどう勉強したらよいのか分からない、なんていうことが生じたりはしないでしょうか。

接続教育とは、本来は高校から大学、大学では教養教育から専門教育への橋渡しの科目として、学生の基礎的な学力を充実させる教育とっていいのかわかりませんが私にとっては、高校から大学へ勉強のステージを移すことになって、自分の勉強のしかたや問題の発見といった学習方法に、どのような変更や意識の改革が必要かという意味での「接続」にちょっと関心があるのです。先生方には教える内容やレベルにばらつきが生じないように配慮をいただいています。大学とはそもそもいろんな意見をもってらっしゃる先生方の見解を参考に、自分の意見を熟成させていくところですから、高校までのような一元化は難しいとも言えます。ですからむしろ、大学での学習のあり方と

しては、皆さんの日頃からの予習や復習にもっと重点が置かれるべきだと思うのです。

各教科ではおおよそ標準的な教科書（基本書）があると思います。授業で指定される教科書もあると思うのですが、ご自分の専門科目の基礎に関わる教養科目については、せめて他の基本書を手に入れて、履修している授業の中で先生は今どこを教えてらっしゃるのか、また他に、どのような考え方や意見があるのかなどを踏まえた上で、授業にのぞむ必要があるのではないのでしょうか。大学の授業は皆さんを学問の森へ導くカーナビのようなものですが、全くこれを受け入れるだけでは批判的な態度は身につけません。自分の意見を形成するためには、自主学習が欠かすことができないのです。このような大学入学に伴う勉強方法の変更については、主題別ゼミナール等でも教えていただけたと思いますので、積極的に各担当の先生方に伺ってみてはいかがでしょうか。



キャンパス情報 —各学部から—

人文学部から

人文学部では、平成18年度に新たな教育組織への改編を予定している。「4年一貫教育」のカリキュラムを円滑に運営するには、教養教育と専門教育がいかに連続していくかが課題である。そこで、人文学部が、このための重要な授業として位置づけようとしている「主題別ゼミナール」（以下、主ゼミ）について述べてみたい。

現在、人文学部のいずれの学科でも、主ゼミの目的を、「学生が自主的に学ぶこと」、「勉学の初歩的スキルの習得を行うこと」をめざすものとし、学科ごとに授業内容について申し合わせをしているが、ここでは人文学科を特にとりあげたい。なぜならば、人文学科の鈴木敦先生が担当された主ゼミの授業が、茨城大学高大連携推進プロジェクトの報告書『高校—大学間の接続教育を考える—人文系分野の場合—』（鈴木敦編 平成15年10月発行）の中で紹介されており、その内容は大いに検討に値するものと考えからである。

主ゼミが始められた当初、人文学科では授業内容は各教員の裁量に任せられていたが、教員たちはどのような教育を行うべきかと悩み、平成13年に当該年度と翌年度の主ゼミの担当者を中心として「主題別ゼミナール懇談会」が行われた。そこで、主ゼミの目的を、人文諸科学を主体的に学ぶためのスキルの習得、つまり文献・資料の検索、レジュメ・レポート作成などに必要なスキルを身につけさせることにあると確認し、授業内容について情報交換を行った。この効果であろうが、翌14年度の学生アンケートにおける主ゼミ受講生の授業評価では、前年度に比べてゼミごとの評価の差が格段に少なくなった。主ゼミの運営には、まだまだ改善すべき多くの問題を抱えているが、この懇談会の意味は大きい。懇談会は、毎年行われており、レポートの作成までの指導方法をはじめとして、他の教員の授業内容を知りえる、楽しい時間となっている。

上記の報告書には、学生たちが自らの関心によって

資料を調べ、レジュメを作成して発表し、また、同級生の発表にコメントを加え、そしてレポートを仕上げていく過程、さらに完成したレポートへのコメントも綴られている。それは、学生たちだけではなく、こうした学生たちに関わった教員たちの報告でもある。教員「たち」というのは、学生たちは、自らの研究テーマについて、それを専門とする教員たちを訪ねてアドバイスを受け、課題を深化させていった。授業担当者以外の教員を訪ねていく一年次生たちの思い、そしてそれを歓迎し相談にのっている教員の様子が浮かび上がるこの報告書を読んでいると、学生が主体的に学ぶことの大切さ、そして複数教員の連携が学生を育てていくのだという当たり前のことを、再認識させられる。

大学でいかに「学び問う」かと考えること、学習の積み重ねの重要性、先行研究に学ぶことの必然性、共に学ぶ級友や指導する人との出会いによる新たな展開、こうしたことが、大学生生活の最初の刺激として与えられる教育体制の確立が求められているといえよう。

（人文学部教務委員長 植 野 弘 子）

教育学部から

授業という場について

平成16年度の6月末から7月初めにかけて、教育学部では7つの授業を公開して、教員や事務局の方々に見ていただいた。これは、より良い授業とは何かについて考えるヒントをそこから得ようとして企画されたものだ。後日の反省会では、日頃の授業のあり方についての様々な意見がやりとりされた。

どのような授業が良い授業かということは、そういちがいに決められない。同じ授業であっても、これをつまらなくと取るか面白いと取るかは、学生の姿勢によるし学生のイメージの質にもよる。とはいっても授業が成立するための条件というものはある。そうである。

授業もまた人間関係において成立しているものだという事は忘れてはならないだろう。ここでいう人間関係とは、個人的関係というものではなく、公的な人間としての、公的な場における、公的な関係である。

この公的な関係に要求されることは、お互いに尊重し合う関係であるということであり、少なくともここに軽蔑的な顔がのぞくようであってはならない。学生は教師を、教師は学生を尊重するという大前提に立たなければ、そもそも授業という行為は成立しない。教師の立場からいえば、学生を軽蔑しながらの授業というものがあつたとすれば、それは授業者が自分自身を軽蔑していることになる考えた方がよい。授業者としてこれほどみじめなことはないだろうし、学生にとって不幸なこともない。

ひるがえって学生の立場からいえば、いい加減な授業を嫌々ながら聞かなくてはならないとすれば、それは授業に臨む学生自身が自分の時間を粗末にし、自分自身をないがしろにしていることになる。このとき学生は、授業において自分たちがもっと尊重されるべきであることを主張すべきである。

尊重するという行為は、好き嫌いを越えた公的な人間関係であり、その場に相応しい関係をお互いに作りあげていく努力を基盤としている。このことによって充実した時間を持つことができれば、教員も学生も、授業を単なる授業として孤立させるのではなく、それぞれの人生を大切に自分自身を慈しむ場として意味づけることができる。授業は、教員と学生が共に考えるという行為を通して、自分自身を真に大切する態度を育む場であって欲しいと思っている。

(教育学部教務委員長 橋 浦 洋 志)

理学部から

現在、私は茨城大学に入学して4年目の夏を満喫しているところです。4年間で一番忙しくて、充実しています。4年生になってから私の生活を少し紹介します。まず、朝は8時前後に起床して、9時ごろまでに学校へ行き、お昼の1時ごろにマウスの世話をします。そして夜の11時ごろに研究室を引き上げてサークル

棟にいき、ヴァイオリンを弾いた後に帰宅。1～3時ごろに就寝という感じです。一日のほとんどを研究室で過ごしているので、運動不足になりがちです。そこで、研究室の4年生で週に一度の体育の時間をつくりました。今（この原稿を書いている時点）ではまだ暑いので、ものすごく汗をかいて気分的にもリフレッシュできています。研究室の仲間とはそのような時間を過ごしたり、研究における知識や苦勞を分かち合っているもので、一緒にいてとても楽しいものです。

さて、私の卒業研究のテーマといたしますと、「放射線で損傷を受けたマウスの脾臓細胞の再生に関する研究」です。1～3年の勉強は一体何だったのかというほど4年になってから勉強することは多いです。そのバックグラウンドとなる分野の知識や実験の技術を習得しなければなりません。実験の技術といってもそんなにたいしたことは行っていませんが、「play well without fail」的な作業は経験を積まないと出来ないものです。研究の内容も思ったよりも単純なのですが、オートマ車を考えてみてください。運転者にとっては扱い易く進化していますが、中身はマニュアル車より複雑です。研究も同様です。結果は単純明白なものの方がきれいですが、その裏には想像を絶する試行錯誤が隠れているのです。つまり、科学の分野でも社会に出るようになった頃には洗練されて非常に形の良いものにはなっていますが、その出来上がったものをちゃんと理解しようとする、それなりの知識が必要になってくるわけです。ここが世間一般と科学が隔絶されてしまっている理由の一つではないでしょうか（「理科ばなれ」と何か関係が！？）。この溝をなんとか理学部卒業生に埋めて欲しいですね。

かくして、もう4年生の半分を過ぎて卒業研究のほうも仕上げていかなくてははいけないのですが、悪戦苦闘している今日この頃です。4年生は進路についても決断を下さなければならず、プレッシャーを感じることもありますが、残りの大学生活を楽しんでいきたいと思ひます。

(理学部4年次 渡 辺 陽 子)

工学部から

唐突ですが、私がいまから約20年前に大学に入学して感じたことは、「どの講義を選択して何を学ぶのか?」、「受講した講義の中から何を学び取るのか?」という選択が自分自身にゆだねられているということでした。高校までの受動的で画一的な学習から、いっきに開放された戸惑いもありましたが、まさにこれが大学で学ぶという醍醐味なのかと新鮮な気持ちになったことを思い出します。

ただ、この与えられた「自由」に戸惑いを隠せない人もいるのではないのでしょうか。特に、それぞれの講義で覚えるべきことの多さにギブアップ寸前という人がいたら、学習の方法と取り組む姿勢を変えてみてはいかがでしょうか。「覚えるべきこと」と言いましたが、本当は「自分の努力次第で学び取れる知識の多様さが大学にはある」と感じてほしいと思っています。大学では、幅広い教養（教養科目）と将来みなさんが活躍する分野での専門知識（専門科目）を習得してほしいという観点から、提供している講義は多岐に渡り、さらに、それぞれの講義が一つの学問体系をかたちづくるほどの広く深い内容をもっています。したがって、教科書を丸暗記するといったこれまでの学習方法（?）ではきっと破綻します。講義から得られる膨大な情報を自分なりに系統立てて整理してその分野（講義）の全体像を把握するよう試みてください。その中で、自分の興味があることを深く掘り下げてみてはいかがでしょうか。

話は変わりますが、私は海外旅行が大好きで色々な国々を訪れています。いつも感じることは、もし言葉が堪能だったら、もっともっと旅行が楽しくなるんだろうなあということです。これは単にその場の楽しみという意味ではなく、書籍やテレビなどからでは得られない、その国の風習や人々の考え方などの真の姿に少しでも触れてみたいということです。じゃあ、言葉だけでOKでしょか。実は、話す内容がなければ言葉は宝の持ち腐れでしかありません。そのためには、文化、歴史、経済などの幅広い教養や人に誇れる趣味も必要と感じています。このことは、みなさんがこれか

ら公私ともに会おう人たちとのコミュニケーションのためにも重要なことかと思っています。

また、「まったく新規で独創的な発想はなにもないところからは生まれない」と私は思っています。一見すると独創的に思えることであっても、その発想の根本にはみなさんの知識や経験なりが少なからず影響を与えているということです。ですから、自分の専門とは関係ないからといって学ぶ分野を狭めてしまったり、ありきたりの発想しか生まれないと思います。「なんとなく」、「とりあえず」で過ごすのは折角の貴重な時間を無駄にします。勉強だけではなく、自分の趣味や友達との関係にも真剣に取り組んでみてください。きっと得られるものは大きいと思います。大学生活がみなさんにとって有意義な時間となることを祈っています。

（工学部教務委員 柴田 隆 行）



聞いてほしい私の意見 —前学期を終えて—

新井 愛 希 (農学部1年)

水戸での私の新生活も前半が終わったわけだが、本当にあっという間だった。とても充実した生活を送れたと思う。一年生の時点では、授業は教養科目がほとんどだ。私はアジアについて興味があったので、「南アジア歴史文化論」や「アジアと日本の経済」という授業を履修した。これらの授業はとても面白かった。「南アジア歴史文化論」では、かなりインドのことについて詳しくなれた。そして、こんなに複雑な国家が存在するのかと、授業を重ねるごとに驚いた。「アジアと日本の経済」の授業では、日本の経済活動がいかに他のアジア諸国に影響を及ぼしているか分かった。それぞれの国が自分の国を豊かにしようとして行なう政策が、大変興味深く面白かった。この授業を受ける前までは、「経済」というと何か複雑なもののような感じがしていたが、今は後期で更に学んでみたいと思っているほどだ。

私は、人生の中で、「大学生」という時期はとても重要な時期だと思う。大学に入学した時点で、多くの

人はこれからの人生をどんな風に歩んでいけば良いのか、自分が本当に向いている職業は何なのかといった漠然とした疑問に答えをまだ見つけられていないと思う。けれど、大学では考え、学び、自分の視野を広げることができる環境と時間がたっぷりある。実際に、前期で自由な時間はかなりあったし、約二ヶ月という長い夏休みもある。これから私は、自分に委ねられたこの時間を使っていろんな人に出会い、いろんな所に行き、いろんな本を読みたい。人との出会いでも読書でも、そこから多くのことを感じ取り学び取ることができるのは、「若い」今しかないと思う。

そして私達は、自分達がいかに恵まれ、整えられた環境にいるかを忘れてはいけないと思う。世界の全人口を百人の村にして、人々の暮らしの状況を分かりやすく説明している「世界がもし百人の村だったら」という本がある。この本によると、この中の村で、大学教育を受けられる人は一人しかいない。百人いるのにたった一人だけなのだ。私達それぞれがその一人であることになる。この一人であることは何を意味するのか考えなければならないと思う。

Voice —後学期への心構え—

角 本 浩 明 (人文学部2年)

大学生活というものは小学校・中学校・高校と比べて、遥かに早いスピードで時が流れていく気がします。事実、新入生だったはずの私がいまやこうして後輩に物言う立場になっているんですから。卒業するときにも「あっという間の4年間(の予定です)だったなあ」と呟くこと必定です。そしてあなたも、大学生活の8分の1はもう返らないのです。

ではかくも短い大学生活を、素晴らしい思い出に昇華するにはどうすれば良いのか。この一年間で私が学び得た確かな方策、それは後期を如何に充実したものにするかということです。後期の過ごし方こそ、こ

の4年間(未定)を最も大きく左右する要素なのです。

その影響が最も顕著に現れるのはやはり成績です。新鮮と緊張の連続だった入学当初と比べ、今の一年生皆さんはさぞや大学生らしい余裕と自信を身に着けたと思います。それとともに上手に怠ける方法(!)も会得したことでしょう。また夏休みの惰性で後期はスロースタートになりがちです。このだらりとした調子で後期を過ごしては成績が落ちないはずがありません。後期こそ初心に戻って授業に取り組まねばなりません。実際私の成績表は前期こそ胸を張れますが、後期とのギャップには偽さず感じます。(涙)

そしてもちろん大学生活は勉強だけではありません。後期はほとんどの授業で試験が翌年になるということ

もあり、前期よりも余裕があります。世間でも「…の秋」というように、何もせずに過ごしてしまうのではなく、この余裕を存分に活用することも大学生生活を満喫する秘訣なのです。それはスポーツでも良し、読書でも良し。友達と派手に遊ぶでも良く、恋に現（うつ）を抜かすのもまた良いのではないのでしょうか。何かしらの思い出、後に顧みたときに懐かしめるものが作ればそれで良いのです。前期は進級してからもなかなか忙しいもので、やはりやりたいことに最も打ち込めるのも後期の魅力なのです。

後期が如何に大事な時期か、わかってもらえたでしょうか。私が言った通りに4年間を過ごしたところで、あなたは卒業するときに「短かった」と思うかもしれません。そうです、結局短いのです。どんなに足掻いても時間の絶対量は変わりません。だからこそ、その貴重な時間が無駄に過ぎ去っていくのを見過ごさないで欲しいと願います。

「短かった。でも楽しかった。」そう言って微笑んで、思い出を振り返れるように。

齊 藤 孝 通（教育学部2年）

1年生の皆さんにとって、前期はどんな半年間だったでしょうか。「単位」という新しい概念や履修科目の多さなど、戸惑いながらも充実した半年間であったことと思います。そして何より、一日一日の過ぎる早さを実感していることでしょう。そんな中、大学生活にも慣れ後期に突入するにあたって、これから始まる後期をどう過ごすかアドバイスしたいと思います。

前述しましたが、前期を終え、皆さんも大学生活にも慣れてきたことと思います。少し前までは不安と期待が入り混じり、精神的に張りつめた中で生活していた人が多かったと思いますが、今となっては不安が消え、後期への期待で胸を膨らませていることでしょう。しかし、この不安がなくなったことに大きな意味があると私は思います。新しい生活に慣れたことで授業時間外の時間、つまりサークルや家にいる時間に、前期よりもより目を向けられるようになります。これらの時間を使って運動に汗を流したり、友達と遊んだりしても良いでしょう。私自身、休日を利用して友達と旅

行に行ったり、学外の行事に参加したり、後期になって心に余裕ができたことで行動範囲が大きく広がりました。そして、それら一つ一つが私を身体的にも精神的にも大きくしてくれました。進級してしまってから、あるいは就職してしまってからではできないことが、今皆さんのまわりには溢れています。皆さんなりの今しかできないことを探しながら後期を過ごしてみても、充実した学生生活が送れるのではないかと思います。しかし、このことを意識しすぎて、学生の本業である学問を疎かにしてはいけません。前期は、ただただ時間割を埋めることだけを考えて時間割を組む人が多かったのではないのでしょうか。大学のカリキュラムが分かってきた後期は、自分に最も合った時間割を組むことをお勧めします。がむしゃらに授業を取るのではなく、自分の将来のためには何を学ぶべきなのか、どれだけ単位を取れば良いのかなど、自分の将来の夢の実現に向けて、最適な道を選択してほしいと思います。そして、一つ一つの授業を大切に、たくさんの知識を自分のものにしていってください。皆さんにとって、良い学生生活になるよう願っています。



教 養 教 育 古 今 東 西

井 上 栄 一 (農学部)

茨城大学で教養教育を受けた経験をもつOBのひとりとして当時をふり返ってみたい。現役の学生諸君はご存じないと思うが、我々が大学に入学した当時は大学教育研究開発センターの前身である教養部というものはまだ存在しており、そこで一年次に教養課程を集中して受講した。多くの同窓生がそうであろうと思うが、私も入学当時は希望する専門分野の学問(私でいえば農学)を学ぶことに大きな期待と希望を抱いていた。したがって、いくつもの学問分野にわたってまんべんなく受講せねばならない教養の講義は、正直なところ高校の授業の延長のようでとても退屈に感じられた。当時は受験勉強からの開放感もあって、ほとんど授業に集中していなかったと記憶している。もう時効が成立していると思うが、私を担当された先生方には誠に申し訳なく思う次第である。しかし、今になって考えると受講した講義は、いずれも個性豊かで魅力的な先生方が大学の教養課程にふさわしい専門的な講義をしてくださっていたと思う。つまり、高校の延長のようだと考えていたのは自らの未熟さゆえであり、当時の私のレベルでは講義の目的や内容を良く理解できていなかったのだろう。こんな不真面目で平均以下の学生ではあったが、教養部の1年間のおかげで、ちょっと変わった先生や気難しい先生がいても驚かなくなったし、自分のレベルを超えている授業の内容に対しても、ついていけるかどうかはともかく物怖じしなくなった。二年次から阿見キャンパスへ移り、農学部の専門課程に違和感なくとけこめたのもこのような教養部での経験があつてのことだろうと思う。昨今、接続教育という言葉をよく耳にするが、今回このような文章を書く機会を与えられ、あらためて考えてみると、私たちが経験した旧来の教養教育も大学における学び方を身に着けるという面では、接続教育としての役割を十分果たしていたと感じられる。

一方で、本学の教養教育は、学部を超えた学生や教員の交流を促進するための良いきっかけ作りの場であ

ったように思う。農および工学部の学生は、二年次から学部がある阿見あるいは日立キャンパスに移動するので、水戸キャンパスで過ごす時間は自分が入学した大学が総合大学であることを経験する貴重な時間であるともいえる。自分の所属する学部の中では出会うことの出来ないような、変わった考え方や感性を持った友達ができたのも水戸時代の良い思い出である。このように、茨城大学の教養教育は専門課程で学ぶための基礎学力や考え方を身につけるのみならず、大学での歩き方を学び、大学としての一体感を醸成するための役割も果たしていたように思う。

現役の学生諸君は現在の教養教育に何を期待し、何を感じているのであろうか。私は昨年度まで学内共同利用施設に所属していたので、正直なところ教養教育の現状を良く知らないのだが、センター化される過程などを経て多くの議論がなされ、昔よりも格段に改善されていることであろうと思う。私も、襟を正してあたらしい教養教育に関わっていこうと考えている。



発行日 平成16年10月
 発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
 水戸市文京2-1-1
 029 (228) 8416 (学務課教養教育係)